

## 2 関心・意欲・態度はこれを見る

### 関心・意欲・態度とは

各教科が対象としている学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度を生徒が身に付けているかどうかを評価します。「学力の3要素」のうちの学習意欲を評価する観点であり、意図的・計画的な指導が必要です。

### 関心・意欲・態度は育てるもの

「関心・意欲・態度」の能力は、はじめから生徒が持っているものではありません。教師が意識的に働き掛け育てる能力です。

「関心・意欲・態度」を育てなければ、「分かるようになろう」「できるようになろう」という気持ちにはなりません。また、ものの感じ方、捉え方、関わり方を支える意欲や価値観を育てなければ、獲得した知識や技能も適切に使われないこともあるでしょう。

### 関心・意欲・態度を見るときは

提出物や忘れ物の有無、挙手の回数等、一時的に表出する事象だけを見るのではなく、その内容に着目し、例えば、獲得した知識や技能を積極的に活用しようとする態度等に焦点を当てるべきでしょう。

また、「関心・意欲・態度」の能力は指導を通じて育てるものだから、単元（題材）の内容のまとめりごとに、長期的な視点で評価します。

個別支援  
が必要な  
生徒への  
対応を考  
えよう

#### 関心・意欲・態度を見るとき

生徒の関心・意欲・態度を見るときは、単に「発言がないから……」という減点法ではなく発言がなくても「～しようとした」「～した」「～できた」等の発言以外の参加の部分も見ましょう。

#### 時間の確保が大切

振り返りシートの記入時間は授業内に確保しましょう。後で提出させるとなると、内容を忘れてしまったり、提出を忘れてしまったり、用紙を紛失するなど提出しにくくなります。



## 評価のポイント

「関心・意欲・態度」の評価の機会には各教科の特性を考慮することが必要です。学習の深まりにつれて単元後半での「関心・意欲・態度」を重視する教科や、美術のように題材の指導経過に伴った評価が必要な教科もあります。以下に、評価のポイントを示します。

### 記述内容から

ワークシートやレポート・ノートなどに記載された生徒の記述から、「関心・意欲・態度」を評価することができます。

例えば理科の場合では、実験レポートにある力学現象について、「質量を2倍にして実験をするともっと分かりやすい結果が出るのではないか」といった意欲的な記述が見られるかどうかを規準にして評価することができます。

ここで大切なことは、「関心・意欲・態度」の観点を確実に見取るための的確な発問をすることです。例えば、数学では、考察に学習内容を関連させたり、活用したりしているかを見取ることが必要なので、適切な発問としては「学習して考えたことを、その内容に関連させて述べなさい」といった例が考えられます。

また、学習形態としてグループ活動やペアワーク等を取り入れた場合の「関心・意欲・態度」の評価に難しさを感じることもあるかもしれませんが、多くの場合、グループ活動等は学習目標を達成させるための一つの手段です。それらの活動を通して各個人が何を学び、どんな考えを持ったのかを記述させる等で、評価することが必要でしょう。

### 行動から

授業における発表等の行動について評価する方法があります。

多人数の見取りが必要な場合、各生徒が発言する様子だけでなく、他者の発言を聞く様子や、反応の様子・行動から見取ることもできるでしょう。

また、英語でスピーチする際、自分の伝えたいことを相手に伝えようとする姿勢や、言葉に詰まりながらも努力している姿勢から評価することができます。音楽や体育では、与えられた課題を達成するために、演奏や体の使い方について練習に没頭している様子等から評価することができます。

### ☆「気付く」という言葉に 要注意

「気付く」という言葉が様々な場面で使われますが、受け止められ方も様々です。「関心・意欲・態度」を評価しようとして「気付いたことを書きましょう」と投げ掛けたら、知識・理解的な記述（「〇〇が分かった。」等）が返ってきたり、思考・判断・表現的な記述（「〇〇と考えた。」等）が返ってきたりすることがあります。「関心・意欲・態度」を見取れるような発問の仕方について工夫が必要です。

### 「体育」の関心・意欲・態度

「体育」の関心・意欲・態度の評価には、学習内容に関心を持ち、自ら課題に取り組もうとする意欲や態度のほかに、公正や協力、責任や参画、健康や安全に関する事項の態度が生徒に身に付いているかどうかという点も含まれます。